

□学会の印象

行動療法学会

第8回日本行動療法学会大会は1982年11月11、12日の2日にわたり、新宿京王プラザホテルで東京医大口腔外科、内田安信教授を会長として行なわれた。

一般演題は26題あり、その内容は一題の基礎的研究(脈搏の偽フィードバックが認知的変容に及ぼす効果)を除いては臨床研究に関するものばかりであった。

対象疾患としては口腔外科および歯科領域の神経症および心身症から、自閉症、飲酒癖・夜尿・吃音などの悪癖、気管支喘息・神経性食欲不振症などの心身症、転換反応・廃疾性不安神経症・強迫症状・対人恐怖などの重症神経症にまたがる広い領域の疾患群がとりあげられていた。用いられた治療の技法も、これまでのように一つの技法を統制的に適用するよりは、いくつかの技法を駆使して効果を期待する傾向が見られ、また治療の人間関係にも考察の眼をむけられた報告がいくつか見られた。

本会では、討論を促進する目的で以上の演題を三つに区分し、久野能弘(兵庫医大)・高山巖(宮崎大)・高石昇(高石クリニック)の3氏による指定討論がそれぞれなされた。

第一日目午後に行なわれた会長講演は「口腔心身症と行動療法」と題して、口臭症、舌痛症、歯科治療恐怖症、顎関節症を始めとするさまざまな神経症ないしは心身症を学習理論から考察し、行動療法によって成果をあげつつある現況が、豊富なスライドと軽妙な説明で報告された。

第2日目午後に行なわれたシンポジウムは、

「痛みの行動療法」というテーマで石川中氏(東大・心療内科)の司会により、上里一郎(広大・総合科学部)、水口公信(国立がんセンター病院・麻酔科)、石井靖彦(東京医大・口腔外科)の3氏による報告がなされた。上里氏は疼痛の基礎的研究として痛みが認知的操作、たとえば注意をそらすことによってうける影響について述べ、水口氏は末期癌と手術後の頑固な疼痛をもつ患者の心理をTAT、SCTなどの投影法を用いて推論し、弛緩法による疼痛コントロールの成果を報告した。石井氏は歯科領域では神経症的な症例のみでなく、もっと広範囲に日常臨床に行動療法が適用されるべきことを強調し、症例をあげてその成果を報告した。本大会は主催校の御努力を反映して、疼痛をめぐる外科的な領域へ行動療法が適用される可能性を示唆する一方、より高次の不安に悩む重症神経症にも対応し得ることが示され、行動療法が精神医学の中心領域にさらに一步をすすめた点で意義深い大会であった。

高石昇(高石クリニック、阪大精神科)

第23回「日本児童精神
医学会総会」

第23回日本児童精神医学会総会は、1982年10月21～22日の両日、国立仙台病院の白橋宏一郎先生を会長に、広瀬川を眼下に見下ろす仙台市民会館で開催された。今回は特別講演をとりやめ、その分一般演題が多くとり入れられることになった。一般演題もいくつかの領域に分けられ、①心因性・神経症性障害(14題)、②家族・母子関係(8題)、③うつ病・うつ状態(4題)、

④自閉症・その他の発達障害(10題),⑤治療・教育・地域活動(9題),⑥精神分裂病(3題)の計48題であった。さらにひとつの工夫として、各領域での演題発表が終わった時点で、あらかじめ指定されたコメンテーターに全体を通しての総評を述べてもらうことで、参加者の頭の整理とあるまとまりを少しでもつくってゆこうという考慮がなされていた。コメンテーターの人選も適格で(牧田清志,村瀬嘉代子,大原健士郎,中根晃,小池清康,松本和雄各氏),従来の座長ひとりでの質疑応答よりもなかなか面白いアイデアであったと思う。

一般演題は、例年であると自閉症関係の発表が大きな部分を占めていたが、今回は「神経症性障害」の発表が目につき、「家族・母子関係」のものに合わせて、家族病理を問題にしてゆこうとする傾向が強かった印象を受けた。

「自閉症」関連の発表は、疫学、行動特徴、諸検査からみた特徴などを論じたものが多く、治療論を述べたものが見当たらず、自閉症の治療に関してはその難しさからも壁にぶち当たっているように感じられ、今後の治療に直結してゆくような臨床研究が登場してくることが切望される。

地方で開かれた学会らしく、「地域活動」の中で地元の活動をはじめ各地域での地道な療育の取り組みが発表されていた。

最後に今学会の中心テーマとして「子どもの抑うつ状態」が選ばれ、シンポジウムが行なわれたが、これは筆者にはいささか意外な印象を与えたが、テーマそのものは大変に興味深く拝聴した。なぜ意外な印象だったかといえば、最近数年間の発表をながめまわしても、この分野の発表はほとんどみられず、2年前筆者が小児うつ病の症例を発表したころは、その存在そのものに否定的な雰囲気主流を占めていたように思う。たった2年間でなぜこのような変化をとげたのだろうか。DSM-IIIのうつ病診断基準の中に幼児期(6歳未満)にもうつ病は出現し得ると明記され、子どもにも抑うつ現象を積

極的にみてゆこうとする動きがアメリカに強く、これが大きな引き金になったかとも想像する。大人のうつ病を理解する上でも子どもでのうつ病研究が果たす役割は少なくないと思われるし、今後、その診断には慎重さが必要であれ、こうした視点にスポットがあてられたことは意義深いと思う。

次回から「児童青年精神医学会」と名称が変わり、次期開催地は出雲市で島根県立湖陵病院稲垣卓会長と決定した。宍道湖の夕映えがことのほか美しい出雲路の旅が今から楽しみである。

小林隆児(福岡大学精神医学教室)

第10回国際表現精神病理学会に出席して

1982年10月22日から24日までの3日間、西ドイツのミュンヘンで、「精神病理学と芸術」をテーマとした第10回国際表現精神病理学会(X. Congrès International de la Société Internationale de Psychopathologie de l'Expression)がドイツ側の設営のもとに開かれた。徳田良仁会長、宮本忠雄教授を始めとするわれわれ一行10名がそれに参加したが、第1日目にはルートヴィヒ・マキシミリアン大学の講堂へ赴き、第2、3日目には造形美術アカデミーに足を運び、老教授から大学生にいたる多数の人たちと共に、六つのセッションにわかれたドイツ語の講演を聴講し、セミナーの会場をのぞき、日本を含む世界各国からの発表に耳を傾け、2階広間に設けられたポスターセッションをも見て廻り、充実した2日半を過ごした。

O.G. Wittgenstein 会長の重々しい挨拶から第1日目は始まり、“daimonion”, “utilitäre noxe”, “defensive-sublinierung”, “ästhesie-